千葉蓮華の咲く祭（その一）

北設楽の花祭を考える

春日井　真　英

（Ⅰ）はじめに
（Ⅱ）「大土公神経」を考える
（Ⅲ）「イクバ」、千葉蓮華の出現
（Ⅳ）蓮華の意匠を花祭から考える
（Ⅴ）インド神話に見る蓮華の問題
（Ⅵ）今後の問題

（Ⅰ）はじめに

花祭といっても、釈迦の降誕祭のことではない。ここで言う花祭は、天竜川水系、大入川、寒狭川流域で行われる霜月神楽のことである。愛知県、静岡県から長野県の遠山郷にかけて旧暦の霜月に行われる神楽であるが、この名前については諸説あって定かではない。ただ、早川氏の記述には「一に花神楽（はなかぐら）とも言って、愛知県北設楽郡を中心に行われつつあった」[1]と記している。始まった時期についても、その由来についても熊野修験の関係があるといわれてはいるものの、不明なところが多い。このことについては、早川孝太郎の著作『花祭』の跋文を書いた柳田国男は、花祭が行われている地域に次のように注目している。少し長いが引用しておく。

現在の花祭地域なるものが、水筋からいへば天竜流域、嶺でいふならば鳳来田嶺の一方の側面に、限られているといふのも偶然ではないかも知れぬ。

と、その地勢的環境に興味を示している。そして

信仰行事の神秘に参与する者が、霊山背後の盆地に隠れ住むといふことは、現に類例もありまた理由もありそうに思はれる。記録伝はらず口碑は証言する無くとも、付近の古くからの大きな信仰と、住民の今も持ち伝へて居る芸術との間に、かって関係が有ったのでは無いかどうかは、一応は考えておいてよいことである。其次にもう一つ自分が此の書を細読する以前、多生冒険の心持を以て、試みに述べて置きたいと思ふ仮想は、この東三河の二つの山の宗教業（ママ）者は、もと熊野の三山に仕へて、諸国を歴遊していた人々と、海上の交通があったのでは無いかといふことである。熊野の古伝は今は甚だしく散乱し、又頗る改造されて居る。その古来の事実と称するものとても、警戒無しに受け入れることは到底出来ないが、少なくとも是が内陸各処の固有信仰と比べれて、幾つかの異色の目に立つものを有つことだけは確かである。従うてそれが三河方面にも入っていた居たか否かは、絶対に証明し得られぬ問題では無かろう。そうして此の神々の始めて熊野に飛来せられたのも、それから其信仰の更に東方に向かって流布したのも、共に其輸送は最初には皆船からで、しかも一旦上陸して

後は、随分嶮岨なる山の上まで、持ち運んでいくことを厭わなかった。海より往来するものは皆平地人であるやうに、今日は想像せられ易いが、事実は寧ろその反対であったことは、海部移住の跡を見ただけでもよく分かる。だから証拠は今後の早川君、及びその同志の手を煩わすの他はあるまいが、行く々々或いは三河山村の花祭も、遠く岸辺伝ひにはるかなる島山陰から、人知れず入って来て爰に保存せられ、又進化改良したものであることが、判明して来ぬものとも断言は出来ない。（中略）続群書類従に採録されて居る足助八幡宮の縁起を読んだ者は、一人として是が熊野の系統に属することを否み得ないだらう。後に行はれた熊野人移住に由って、直ちに其前にも移住があったことを類推するのは粗忽かも知らぬが、兎に角に設楽は熊野信仰の入り込み得ない土地ではなかった。[2]（後略）

柳田国男は、このように北設楽或いは天竜水系のことに注目している。ここでは引用しなかったが、彼は獅子舞が政岡にも三勝にもなって見物を泣かすことにも触れ、浄瑠璃姫伝承にも関心を示し、この地域の文化的基盤の深さを推し量っていたように見える。其の流れの中で。彼は熊野信仰との結びつきを想定していたのであろう。

花祭、そのものを考えてみても筆者には「熊野」の姿はまだ明確になってきていない。だが、『北設郡史』＝近世編によると神社数では熊野神社が北設楽に最も多く、諏訪神社も同数という。もちろん、交通の問題からしても諏訪も無視するわけにはいかないであろうが、この地には熊野神社がなぜか多い。[3]郡史によると北設楽郡内には、熊野神社　16社、諏訪神社　16社、津島神社　15社、八幡神社　12社、神明社　6社、白鳥神社　4社　白山神社　3社となっている。熊野・諏訪社を筆頭に津島・八幡社が断然多い。と、記されている。だが、花祭は神社の祭神の祭ではないことは花祭の行われる地域ではごく一般的なことである。それは、一般的な神職によって行われる祭ではなく、「花太夫」と呼ばれるものによって取り仕切られるのである。さらに、

「花祭は氏神の境内で行われる場合も、中心となるの神は氏神ではなく、みるめ神、きるめ神という全く違った神である」[4]

と指摘されている。そして、祭は「花太夫」とそれを補佐する「みょうど」と呼ばれる特別の家柄の人々によっておこなわれる。ただ、過疎など、急激な社会の構造的変化によって昔ながらの家筋に頼れる地域が少なくなり、「保存会形式」で祭礼が維持されるようになり、多くの伝承・型の継承が困難になってきている。この激しく変化する時代の流れの中で「保存会長」として花祭の姿を考えるのは大変厳しい状況になってきているが、祭礼を継承しようとする地域の状況である。ある意味で、祭礼・祭式の簡略化への方向へと進みつつあるように見受けられるのでもある。その理由としてもともとの花祭に関わる意味世界を理解しようとする難しさにあるといえる。

古文書、あるいは祭文の難解さは民俗宗教の問題とも関わってくるからである。祭文の中に見る難解な言葉の一例として「きゅうせんはちかい」「しゅみせん」「だんとくせん」という言葉をあげることが出来るが、これらは「九山八海」「須弥山」「檀特山」と書き、その意味するところは仏教的世界観と密接な関わりがあり、花祭の背景に密教的な世界の広がりが存在する事を意識できなければ、この祭の内面的世界は見ることが出来なくなっていく。ただ、若者達の軽やかな体裁きと、五色の紙で切られた湯蓋、白蓋、ザゼチだけしか見えてこないことになる。ユネスコの世界遺産登録を目指すという愛知県北設楽の東栄町の花祭に必要なことは、舞などの芸能ではなく、永く秘められてきた祭事として見直すことが重要な課題であると指摘したい。

簡略化されてきた祭事として「天の祭」[5]を指摘することが出来る。

かっては民家が花宿（花祭の祭場）であったころ、その屋根裏で、密やかに行われ一般の目には触れることのほとんどなかった祭式である。これは花宿が公民館などに移されたことと関わることであろう。これらは棟祭とも呼ばれていたことから祭の理解の上で重要な意味合いを持つと考えられる。いや、祭での儀礼・祭式にはそれなりの意味・意義が隠されていると主張したい。このことは「神入り、神拾い」[6]の問題とも関連する。それは、「神入り」後に改めて行われるものであり、極めて異例というべき勧請なのである。この「切る目の王子」と呼ばれているものは熊野三山に関わりを持ち、紀伊日高郡切る目の荘の祭神といわれている、と早川は記している。だが、この護法童子は（仏法を護るべき存在なのだが）熊野では僧侶を殺す立場に立っている。その咎で片足を切り落とされている。そのような護法童子がこれほど丁重に勧請されるのはどういう理由からだろう。この「切る目の王子」の図像については山本陽子[7]が明星大学の紀要で論じている。

花祭に関連しては、多くの書物が出ている。ここではそれぞれの文献には触れないが、筆者は次の書物に注目している。それは『奥三河花祭り祭文集』[8]である。この書物には、かって昭和五十五年に北設楽花祭保存会が出版した『中世の神事芸能　花祭の伝承』に102頁～108頁にかけて収録されていた「御園史料」の「大土公神経」が、あらためて212～227頁にかけて掲載されているからである。且つ解題がその後に4頁にわたって副えられている。引用してみる。

大土公神経は、普通「大土公神祭文」と呼ばれる霜月神楽の基本祭文だが、三河の神楽・花祭では、しずめの反閇に引き続いて土公神（土公やすめ）が実施されてきた。反閇に合わせ弊を捧げての誦行のため、現在の花祭では次第から省かれている。経の名が付くのは御園・大入のみだが、ここでは天の祭と、釜払い、しずめの反閇時に誦えられていた。

中世以降、山岳修験の徒によって伝播された地祇・地霊鎮めの祭文は数多いが、本経は内容が、十二月将王、日月星宿、五龍王、冥官など神祇をはじめ、五行五色など、陰陽道に由来する観念によって構成されていて、修験道の儀礼が古代の陰陽思想を摂取して組み立てられたことを示す好例となっている。

また、古代の祭文が国家や貴族の要望に応える内容であったのに対し、村や庶民の願望を担う内容に構成されているが、これは中世祭文の特質といってよいだろう。国の起源を仏法の五天思想（天竺を中心とする）に依拠し「南贍部洲豊葦原国」[9]と記すが、この構成は永承五年の泰山府君祭文、「南閻州大日本国」、天永四年の北辰祭文「南贍部州日本国」など、陰陽道色の濃い祭文に準じるとものと言える（筆者は永承五年の『泰山府君祭文』、天永四年の『北辰祭文』未見、不詳）

祭文とは法会修法において、祈祷願意を述べるもので、神道での祝詞・寿詞、仏教での願文・表白にあたるが、経と呼ぶことは、単なる祭文としてではなく、仏に由来する誦文として位置づけたことを物語っている。

このように本経は、密教のみならず陰陽思想の伝統を受け継ぐ、修験道祭文としての普遍性をもつものだが、筋書きとしては、父王の遺産相続をめぐる五人の王子の争いと、和解の物語を軸に、宇宙（天地）と季節の分割統治に至る創世神話として構成されている。同じ筋書きの土公神祭文は、中国地方・東北地方の神楽にも伝わり、五龍王の芸能を伴った荒神鎮めの次第が組み立てられているが、三河では土地神土公神の由緒を湛えて五方の大地を踏み、合わせて宇宙の空間を鎮めるために読誦したあと、五人の王

子（ただし末子は中央の土地・空間を統治する五郎の姫宮で、我が国の祖神）。唐土、天竺、竜宮、鬼ヶ島、諸国の宝数えをするが、この宝を、「大土公神経の御前に数え参らせ候」としるすものと、「御宝土公の御蔵へ数えて参らせ候」と記すものがあり、いずれの場合も、子孫繁盛、日夜の安泰を願い荒神呪を誦えて終える。

と記している。さらに武井は

なお、本経では末尾に宝数えではなく「土公神法大事護身法〆」が認められ、その中で「天地開始シソノ神万（ママ）ッ代マテモサカエサカユル」「次千代マテト祭シツムル」の歌のあと「土公神万ノ宝（宝珠の画）納テソオク」とあり、行を替えて「其後意任祈念申入ヘシ」と、十一種の護身呪（真言）が掲げられている。

と、記している。つまり、軽々しく口にするべき祭文ではないと言うことを意味しよう。これは「大土公神経」の特殊性、重要性を示すこととして認識しておかなくてはならないことであろう。

（Ⅱ）「大土公神経」を考える。

ここでは、『奥三河花祭り祭文集』に見る「大土公神経」を引き、考察を加えながら話を進めることにする。

（一）

この大土公神経は五方位の神々を勧請するところから始まる。

謹請東方ニ大土公神部類眷属九億四万三千四百九十神等来臨、影向セシメ給フ
謹請南方ニ大土公神部類眷属九億四万三千四百九十神等来臨、影向セシメ給フ
謹請西方ニ大土公神部類眷属九億四万三千四百九十神等来臨、影向セシメ給フ
謹請北方ニ大土公神部類眷属九億四万三千四百九十神等来臨、影向セシメ給フ
謹請中央ニ大土公神部類眷属九億四万三千四百九十神等来臨、影向セシメ給フ

で始まる。他の祭文と同じく東西南北中央の五方位が意識されたものと言えよう。まだ眷属の数の由来は判らないが興味深い。

そして、「大土公神の御本地ヲ（委ヨイ世）尋ネ奉」、天も地もない処からの世界生成の話を説くのである。この形式は眷属達を前に世界の来歴を説き起こすものと言って良い。

五方位からの土公神の眷属達の前で、呪師でもある花太夫が各々の眷属達に、彼らの由来を語り聞かせる場所でもあると見なすことができる。

（二）

天も地もない衆生草木の定まらないところから、世界生成の話が説かれだしていく。天より顕われる赤白の珠、それは鳥の飼い子の形（つまり卵のような＝筆者）のようなものだと説く。これが二つに分かれて、澄んだものが「天」となり、濁れるものが「地」になった。興味深いことは、この地となったものが四つに分かれて、四方の四季になったとするのである。その後流れが大海となり、黄なるものが仏となり、赤きものが神となり、白きものが人間となり、さらに黒きものを畜生と定め、青木ものを草木と定められたという。さらに十二月の将王と申すものが顕われて、この世界を建立したという。

この段階で、すでに五色の基本的な考え方が示されているところは注意すべきであろう。それは、黄＝仏、赤＝神、白＝人間、黒＝畜生、青＝草木　という言葉で示されている。さらに十二月王将なるものが突如現れることである。しかし、まだこの段階では「東西南北周囲上下」は弁えがたしとしている。だが、ここには色彩による方位の象徴化を見ることが出来るのである。そして、この地となったものが四に分かれて四方の四季と為ったとする記述である。その次に、世界生成の話が語られるのだが、筆者はここに盤古説話等[15]が影響を与えていたのではなかったかと考えるのである。盤古説話では、彼が死んで、その頭が四の岳となると記されている。

（三）

そのとき、かの珠の間より、少し風が吹き、
金色の雲を湧き動かし、その雲は雨雲となり、
雨を降らすこと車軸の如し。風が吹き来て天裂け（？）（一部略）
地に下る水は雲に連なりて山を崩して平地となる。
そのとき火輪出てきて、天に昇ること限りなし。
雨風水を焼き固め、金輪となる。
金輪の光連なって大地となる。
その時、地水火風空との初め
空（武井は「ソラ」とおくっている）の時、最初から、
クチノ初めをば日月星の仏と申す、又は阿弥陀如来とも申し奉る、
無量寿御身を変じ給えば十二月とも申し奉る

しかし、まだ日月星宿は顕われて居らずこの世界は冥々として暗かった。

ここに阿弥陀如来の基に菩薩が使わされる。

千葉蓮華の咲く祭（その一）

（一）は御迹菩薩（おんしゃくぼさつ）

（二）は吉祥菩薩である。

この菩薩たちが語らって第七天の七宝を取ってこの世界に戻り、日月星宿を造り、この世界を照らされたという。

さらに十二月の別名とも付記している。だが、仏教の世界には第六天はあるが第七天は見あたらないのである。[16]

また、ここに記されている「車軸のごとき雨」という記述は興味深い。なぜならばこの表現は「阿毘達磨倶舎論」巻十一分別世本第三之四[17]の「世界生成」の話に見ることが出来るからである。この車軸、もしくは杵のごとき雨、という形容はよういにできるものではない。この祭文を作成したものが、「倶舎論」あるいは「大楼炭経」、「起世経」、「起世因本経」に触れていたことを暗示するものだと考えたいのである。しかし、「倶舎論」では「鳥の卵」の話は出てこない。そして、澄んだ部分が天となり、濁った部分が地と為るとした天地が別れる話はない。ここに我々の住む世界の構造が説かれる。先に述べた仏典を注意深く読んでみると、仏典での世界創世は単なる世界創世を意識していない。永い時間意識を背景として、滅亡しては再生する世界としてこの世界を意識していると読み取れる。

そこでは、世界の最下層に「空」（くう＝筆者）が、その上に「風輪」がある。それは、虚空の上に厚さ十六億由旬[18]の「風輪」、つまり風があり、その風輪は金剛輪で繋がっているという。（つまり、金輪がこの風輪をつなぎ止めているという）。その風輪の上に、大きな雲雨が覆い、雨を降らす。雨粒は車軸の如くの大きさで、風輪の上に凝縮し深さは十二億二万由旬にも達するという。この「水」は風輪の上で留まり、どこかに流れ去ることはなかった。又、違う風が「水輪」の上を吹き、この「水」の上に金を生成させた。これは、熱き乳の上の膜のようなものだが、水輪の厚さは八洛叉踰繕那、また金輪は厚さ三億二万踰繕那であるとする。筆者は、この「車軸のごとき」雨に関

心を持つ。それは、他の世界生成（あるいは世界創世）を扱っている仏教教典[12]での形容との類似である。だが、「大土公神経」の方では時間の意識が見受けられない。いうなれば時間意識と、世界が壊滅し生成をくりかえすという視点が欠けるのである。

これまでの処、「土公神経」では阿弥陀如来の出現と、御迹菩薩と吉祥菩薩の尽力によって日月星宿がこの世界に備わり、明るく照らし出されたことになる。だが、やや唐突感が拭われないことは明白である。

（Ⅲ）「イクバ」、千葉蓮華の出現

ここで宇宙天地（ママ）より種木の冠をし、左の手には火の玉を持ち、金の靴を履いたイクバという者が出現する。そして口には軟草を含んでいるという。

彼は東方を枕とし、西を後にして天に向かった伏せられたという。それによって十干の甲乙丙丁が東から定まり、中央が戊己が定まった。さらに左の火の玉より日光菩薩が、右の水の玉からは月光菩薩が生まれる。いうなれば、太陽と月の誕生である。さらに、彼の身体の大小ノ骨から一年を十二ヶ月することになり、さらに日は三百六十日とされる。イクバの吐く息から雲、霧、霞、風がうまれた。又、身体の毛から衆生草木とし、さらにその臍の中から千葉蓮華が生じた、とする。この「千葉蓮華」について大土公神経では「蓮華は散りて世界わ国土となる。一つ百億、須彌百億、梵天百億、日月百億、鉄囲山（ママ）、業火百億（ママ）、大小諸神、三十三天皆ことごとく出生するところ也。

と、記している。この段でのイクバと前段階との話にはかなりな隔たりがあるように見えるが、世界生成から草木衆生の出てきたことを考えると筋は通っている。ただ、注目すべきは「臍」のうちより「千葉蓮華」が生じるところである。先に触れた世界生成を説く仏典では「臍」の内より生じる蓮華の記述はない。「華厳経」ではこの世界を蓮華蔵世界と表現し、蓮華は悟れる者を象徴していると理解できるのである。それと同時に蓮華はこの世界の中心としての毘盧遮那（ビルシャナ）如来つまり、大日如来の象徴して顕われ、

「この蓮華蔵世界海の内において、一一の微塵の中に一切の法界を見る」（盧遮那仏品）[13]

ことを求めるのである。それ故に、花太夫が執り行っている祭式は、まさに大宇宙とこの地が一体化するという「一即一切、一切即一」という密教的なものと言うことが出来るのである。このような祭式が北設楽の山の中で執行されていたと、考える事が出来るのである。

北設楽の、民俗宗教的儀礼を、そのまま教典に即して解釈することには問題が残るが、改めて「華厳経」などを詳しく読み込みながら検討したい。

（Ⅳ）蓮華の意匠を花祭から考える

花祭の祭場を飾るものとして幾種類もの切り草がある。そのなかに「蓮華」とおぼしき切り草を東栄町のいくつかの地区では見ることが出来るのである。

振草の古戸地区の五大尊の一部に見る「御幡」

小林では「御旗」

足込の「御幡（おはた）」

布川でも「お幡」

これら御幡と呼ばれるものは、地区によって意匠が微妙に異なるがそ

れらは蓮華をかたどったものと見ることが出来る。さらに御幡は、四方の忌み柱、又は湯蓋の四方に結わえ付けられていることを考慮すれば、なおさらその持つ意味が問われることになる。また、古い舞衣装で下黒川の花の舞で用いられた古い舞衣装には蓮の花、蓮華の花びら、宝珠があしらわれ、波模様が描かれているものがあるが、この衣装の意匠は興味深いものである。[15] その衣装には蓮華の花びら、花が一面にちりばめられており、他の衣装に比べて注目に値する。一つは蓮華などとは基本的に無関係の地でもあり、このような意匠をわざわざ注文するには、それなりの意識があったことを意味するからである。この意匠は、他の舞衣装に見る注連縄、夫婦岩、吉祥の鶴などとは、明確に一線を画した意識の違いを見せてくれる。

(V) インドに見る蓮華の問題

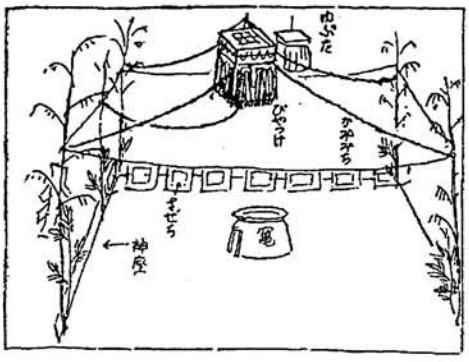
ところで、臍の内より蓮華を咲かすのはヒンドゥー教のヴィシュヌ神である。インドの神話によれば、世界のはじめには、茫漠たる大洋の上で宇宙の維持者である大神ビシュヌが、一頭の巨大な蛇を寝台にして長い冥想の眠りに耽っている。時が熟するとこの神の臍から蓮が生え出て花を開き、その中に創造神ブラフマーが誕生することによって、世界の創造が開始される。

これまでいくつかの祭文を考察してきた。そこから指摘できることは、花祭の祭場は清浄化され、そこに新しい世界を構築していくという流れが存在する事であった。あるいは、この祭文でも気が付く事だが、世界構築の物語が説きおこされていくことである。花祭に当てはめて考えると、[16]

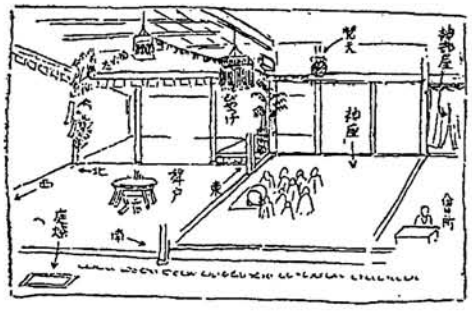
(ヴィシュヌとブラーフマナの図)

清浄なる地に聖なる中心としての須弥山を設ける作業が行われ、花太夫の意識の中で「大宇宙である法界」[17] が見えていることになる。世界の茫漠たる海を湯釜が象徴し、湯蓋が世界の維持者として東西南北、中央の五方位を形づくることになる。地区にも依るがボデン（梵天）へと神道が引かれていく[18]（豊根村・三沢山内＝筆者）。早川孝太郎の示す舞庭の図を参照すると、舞庭中央の竈から東西南北の五方位が定められ、宇宙の基準が浮かび上がる。この構造の中には「大土公神経」の中に見る五方位・中央の設定の構造が重なっていると言っても差し支えないだろう。それは、湯蓋の中の切り草の日月（小林）、御園の日天子・月天子の幡、坂宇場の湯蓋に見る日光・月光、上黒川の湯蓋に潜む月光・日光の存在からも指摘できる。

花祭の舞庭をこのような視野から眺めることは祭文を理解すれば、容易であろう。舞庭の四方を飾るザゼチと呼ばれる切り草の中にも日



第13図　舞戸飾付け（振草系）



第14図　舞戸飾付けを中心として（大入系）

早川孝太郎による舞戸の図[19]

月を見ることは出来るのである。この日月の切り草を有する地区は、ザゼチに限定してみて表を作成してみた。『中世の神事芸能　花祭の伝承』[3]と、『古よりの花祭　受け継ぎし技と形』[4]を参考にしてみたが、日月に対する意識の強さがはっきりと読み取れる。その中でも、鳥羽、二見ゲ浦の夫婦岩に太陽を誂えるところもあるが、これらは廃仏毀釈のあおりを受けた結果、伊勢を強調したことになったものと考えることが出来る。本来、ここではザゼチを問題とする予定ではなかったが、大土公神経の祭文を考える過程で触れざるを得なくなってしまったが、改めて別途考察することとしたい。ただ、『古よりの花祭　受け継ぎし技と形』に収録されている上黒川のザゼチは、筆者も実際に見たが、

太陽(日)のみ 波の有無は関係なし	日・月 波は関係なし	二見浦・太陽 （夫婦岩）	二見浦 （太陽）	ないところ
1）月 2）中設楽 3）河内 4）下黒川 5）古真立 6）上黒川	1）中在家 2）足込 3）古戸 4）下粟代 5）布川 6）小林 7）坂宇場	1）東園目 2）坂宇場 3）古真立 4）上黒川	1）津具	御園 ただし、幡に日天子・月天子・月天使がある。榊鬼の持ち物の榊に日が付いている。

右記の表は『中世の神事芸能　花祭の伝承』による。

また東園目大入地区では榊に鏡を付けていたことが「花祭会館」の展示で判明した。

太陽(日)のみ 波の有無は関係なし	日・月 波は関係なし	二見浦・太陽 （夫婦岩）	二見浦 （太陽）	ないところ
1）月 2）中設楽 3）河内 4）下黒川 5）古真立 6）上黒川	1）中在家 2）足込 3）古戸 4）下粟代 5）布川 6）小林 7）坂宇場	（東園目）消滅 下黒川（挿入） 2）坂宇場 3）古真立 4）上黒川	1）津具	御園 日天子・月天使の幡がある。又、榊に金紙で太陽が作られている。

右の表は『古よりの花祭　受け継ぎし技と形』による。

新しい創作であろう。それぞれのザゼチの意匠が花祭と花祭の祭文と密接に関わりを持つと考えられている以上、祭の支度、祭場の構成は祭文類と密接な関係を持つことは必定である。それ故に、祭文と祭の構成、祭場の構造なども問題となるのである。それが、ここでは、日月によって象徴化されていると考えるのである。ただ、時代の流れによって微妙に変化していることを忘れてはならない。

しかし、ザゼチあるいは、祭場の飾付けには昔ながらの意識が反映されている。

ただ、くりかえすが小林地区のザンザ、つまり湯蓋、白蓋の上に切られる切り草に日月が切られていることは注目すべきものであろう。さらに、御園には日月のザゼチはないが日天子・月天使の幡は存在する。さらに、榊には、金紙で太陽を顕わしていると形づくっている。太陽と月、あるいは太陽、それが如何に重要かという認識に他ならない。

そのことは、北設楽地域の石像文化財（石仏等）からも指摘できよ

う。馬頭観音・正観音・如意輪観音・十一面観音・不動明王の他に知見印を結んだ大日如来の存在に繋るかも知れない。ところで、大日如来とは毘盧遮那仏のことであり、宇宙全体を象徴するものである。そのことは、土公神の祭文で説かれる須弥山を中心とする世界構造にも通じる。だが、イクバなる存在の出現は、世界創世に纏わる話として倶舎論などだけでは説明できない要素が混じり込んでいるのである。

(Ⅵ) 今後の問題

世界生成という視点からだけでも、以上のような問題が古祭文から指摘できる。だが、まだ大土公神経の全体の考察を終えることはできていない。どこか一方的な視点に立てば、簡単なことなのかも知れないが、北設楽という地域を眺めてきたこれまでの体験からじっくりと考えていきたい課題となった。

仏教的、いや密教的な視点からは大日如来は、無限宇宙に周遍する点で超越者であり、万物と共に在る点では内在者にもなる。そういう意味では、彼から世界が生成されることは不思議ではないことになるのだが、この世界生成の語りが、中国の盤古説話にも重なるのである、[21]ことはすでに触れた。

その後に、仏教的に世界生成が語られるのであるが、まだ未解明の部分がある。このイクバなる存在を、ヴィシュヌと比定して良いのかはまだ問題である。たしかに教典では、このヴィシュヌ神の臍から蓮華が生じ、さらに梵天が生じる記述を見ることは出来なかった。だが、花祭の舞庭（祭場）には「梵天」（御幣）は存在する。

この蓮華から生じるのがブラーフマナ（梵天）は、水面に浮かぶ大蛇の上で眠るビシュヌの臍から生じてくるのだが、ここだけでも北設楽に残る祭文の複雑さ、面白さが理解できる。単なる世界生成が語られるだけでなく、北設楽のこの地域がいかに世界的なネットワークの中にあったかを想造するだけでも身が引き締まる。

花祭に関わる、祭文については筆者はすでにいくつか論文[22]をものにしている。

註

①（早川孝太郎　Ⅰ-33頁）。ここでは早川孝太郎全集を用いる。とくに触れていないかぎり、早川Ⅰとは早川孝太郎全集　未来社（1971）1978年発行、その第1巻を指し、早川Ⅱは同じく第2巻を指す。

②（花祭Ⅰ　5f頁）

③（『北設楽郡史　近世』北設楽郡史編纂委員会編　昭和45年　268頁）

④（『北設楽郡史　民俗資料編』北設楽郡史編纂委員会編　昭和42年）　125頁。）

⑤早川Ⅰ109頁

⑥早川1-106～110頁

⑦山本陽子　「切目王子像小考--熊野曼荼羅から一本ダタラまで」『明星大学研究紀要』12巻　2004　29-36頁

⑧『奥三河花祭り祭文集』武井正弘　編　岩田書院　史料叢刊4　2010　この書物は前書きの処で中村茂子氏が発刊のいきさつを、そして発刊に寄せてで尾林克時氏が武井正弘氏と、大入地区の古文書の関わりを述べていられるが、祭文に関わる古文書の重要性が認識され始めた契機になっていることが忍ばれる。現在、このような活動を経て慎重に古文書類の調査がなされつつあることを別の方々からも知る機会があり今後の調査活動、並びに研究に期待している。

⑨「南贍部洲豊葦原国」とは仏教経典に示される閻浮提（Jūmbudvīpa、えんぶだい）を意味し、そこにある豊葦原の国を意味しようとしていたと考えられる。本来はこの閻浮提（Jūmbudvīpa）は印度を意味す

ると考えられている

⑩中国の神話の天地開闢説話にみえる創世神の名。盤古が死んで、その頭は四岳、目は日月、脂膏（しこう）は江河、毛髪は草木となったとする説話。《三五暦記》、では地がなお鶏子（けいし）（卵）のように混沌たるとき、その中に生まれ、そこから天地が形成されたとする長人の説話は、重黎（ちようれい）の説話とも似ている。また《述異記》には、この巨人の死体から万物が生ずるという説話の形式は、インドや北欧等にも見ることが出来る。『増訂日本神話伝説の研究-1』高木敏夫 大林太良　編集　東洋文庫241　平凡社　74頁

⑪第六天は他化自在天の世界であり、欲界の最上第六位に位置する。欲界とは、いっさいの衆生の生死輪廻（しょうじりんね）する三種の迷いの世界の一つ、すなわち、欲界・色界（しきかい）・無色界のことであり、第七天を想定すると言うことは、この三界を越えたところ、三千大世界を越えたところと見ることになる

⑫阿毘達磨倶舎論」巻十一（三蔵法師　玄奘詔訳）分別世本第三之四、（大正新修大蔵経　第二十九巻毘曇部1558）他にここで参照しているのは「大楼炭経」、「起世経」「起世因本経」そして「倶舎論」である。これら仏教の世界生成神話の共通するところは世界の壊滅・生成の話を踏まえてこの世界の問題が論じられていることである。単に世界の生成を論じるのではなく、今この世界が終滅し、又永い時間の後に生成してくると言う思想の基で、語られる世界創世の話である。そこには長い時間的な経過が背景に存在していることである。そこには、阿修羅と天神との戦いや、地獄などの記述が存在している。また大地を形成する『水』は雨として大地に降り注ぐのだが、「雨の形容」では「大楼炭経」では車のような雨と記し、「起世経」第十一住劫品では車軸あるいは杵のような雨、また「起世因本経」第九で　「起世経劫住品第十一」として又如夏雨其渧大とし、さらに同じ段で車軸あるいは杵の如しとしている。このことは、大土公神経の作者（？）が、先に述べた仏教経典に触れていたことを暗示すると考える事が出来る。だが、時間意識までは扱い切れていないようだ。

⑬厚さ十六億踰繕那（＝ヨージャナ。他の教典では由旬。一ヨージャナとは帝王の軍隊が一日に進む距離、約十～十五キロという。中国では六町を一里（六百六十五メートルとして）四～三十里）とされている

⑭『仏典を読む』大正大学選書12　佐藤隆賢　石上善応　他　第一書房　昭和63年42頁

⑮『古よりの花祭　受け継ぎし技と形』（東栄町　平成24年　監修・文　山本宏務　一九七頁

⑭『南方民俗誌叢書　5』辻直四郎　昭和18年、『印度―悠久なる文化の全貌―』

⑯辻直四郎　名著普及会　昭和61年復刻　三百二十頁より

⑰前掲書　『仏典を読む』大正大学選書12　42頁

⑱この図は、早川孝太郎全集第Ⅰ　七八頁のものである。第14図の大入系のものは三沢山内のものと思慮される。

⑲『中世の神事芸能　花祭の伝承』　北設楽花祭保存会　昭和55年（1980）

⑳前掲書　註⑬　参照

㉑盤古神話。『三五暦記』に記されている。『中国神話』聞一多・中島みどり　訳注　東洋文庫497　平凡社1989を参考。

㉒拙論　ⓐ「花祭の祭文考――「しめのはやし」（富山）を通して――」『東海学園大学紀要』第16号　人文科学研究編2011　ⓑ「花祭（北設楽）の祭文から見えてくる世界　――大宝（たいほう）蓮華の花咲く世界――」『東海仏教』第五十八輯　東海印度学仏教学会　（平成二十五年）